防災
まちづくり
大賞 20 年

第 16 回受賞

平常時の「きずな」は緊急時の「きずな線」
～本荘の挑戦～

岐阜県岐阜市 本荘まちづくり協議会 会長 井上 いほり

平成 17 年春の交通死亡事故をきっかけとし、地域の絆を深めるために、救急カード・命のバトン事業に取り組みました。また、高齢者が気楽に集えるサロン会場を細分化（歩いて行ける範囲）することの工夫により、地域内に安心感が芽生え始めていました。そんな時です。

1 再起動

平成 28 年冬にも身元が確認できない交通事故が発生しました。二度とあってはいけないと始めた活動と現実の隔たりに心が震えました。そこで今までの活動を振り返り、改善点を精査して、他県市で取り組まれている活動で運用できることは学ぼうと、東京都大田区で取り組まれ全国に広がり始めた「見守りのキーホルダー」の情報を頂き、地域で取り組むことにしました。

2 強制と共生

大田区の取組は、行政主体の運用です、岐阜市では支援はありません。いざという時自分の名前や住所・お薬情報が確認できるキーホルダーですが、登録することは強制しません。持つことで安心できることをご理解頂きながら登録者を増やしています。情報管理やキーホルダーの購入費等の行政支援が無いことを、これは地域力を高めるチャンスと捉え体制強化に取り組むこととしました。

支援が無くても人財は豊富です。個々に力を発揮していただき、出来ないことを数えるより出来ることを考える行動型の地域へと変化し始めました。

3 信頼と情報共有

高齢者サロンや各種活動の参加者と福祉の専門家をつなぐことで、互いが顔なじみとなり見守られる人が安心して日常生活が過ごせます。それは、12 年かけてお預かりする情報をもとに築き上げてきた信頼が活かせる時です。

地域では、自治会長が自治会内の高齢者やひとり暮らしの方、お体に障がいがある方など把握することに努めています。

サロンの一コマ

見守りのキーホルダー

車中泊検証

犬塚貴先生による認知症の授業

そうすることで自分の自治会内の人が見えてきます。情報を把握し関係者間で共有できると、その情報から支援へ動き出せる「共助」へとスムーズに移行していきます。

4 検証（現場重視）

平成 29 年度は、昨年末の事故の気づきから地域のきずな線について検証してみました。

災害時の愛玩動物同行避難／飼い主の関心度が低い、車中泊想定の車両／収容スペースが少ない、自治会加入率の減少／未加入者の情報伝達課題、防災士の育成／チーム活動の充実、高齢者参加事業での対応／危険個所（階段やスロープの苔）発見等机上や指示書のみでは気づかなかった新たな改善点や取り組む点が見つかりました。

5 展開

今、地域の人財力を生かし、気づき・考え・行動でき、広く地域を見渡し見守れる１人一役の組織作りが求められています。

認知症や障がい者への学びは地域にある岐阜市民病院の専門医と地域作製のＤＶＤがコラボして子供たちに支援。福祉・防災は、関係機関と声かけあい、認め合える関係を作る。関係者一丸となって取り組んでいる環境が「本荘に住んで良かった」と感じて頂ける地域の土台となっているのではないでしょうか。

尊い命の犠牲から取り組み始めた事業は、時代に即した展開方法で、関係者の心に想いやりの灯を燈し続けていくことでしょう。誰かのためではなく、いつか通る我が道の充実と係る誰もが意識改革ができれば地域は変わり人も変わると思います。終わりのない活動ですが、支え合い・理解し合える仲間と共に地域で生きる楽しさ素晴らしさが実感できるように多方面から挑戦し続けていきたいと考えています。